

『栄花物語』における三条天皇像：〈雄々し〉と 〈らうらうじ〉を中心に

二宮，愛理
九州共立大学：講師

<https://doi.org/10.15017/7325724>

出版情報：語文研究. 135, pp.1-18, 2023-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『栄花物語』における三条天皇像

— 〈雄々し〉と〈らうらうじ〉を中心に —

二 宮 愛 理

はじめに

『栄花物語』には多くの天皇が登場する。彰子が入内した一条天皇と、道長を外戚とする後一条天皇との親子に挟まれるようにして帝位についていたのが、在位わずか五年の三条天皇である。史実においては、感情的な人事や道長による冷遇が指摘される三条天皇であるが、道長の専横に最後まで立ちはだかつていた人物であるとも言える。一方、『栄花物語』での三条天皇はどうだろうか。当該作品では、中関白家のような道長と栄花を争った人々も好意的な筆致で描かれるが、三条天皇はいかなる人物として描かれているだろうか。

本稿では、梅沢本本文における『栄花物語』での三条天皇

の人物像について明らかにすべく、〈雄々し〉〈らうらうじ〉という二つの語に注目し、物語の文脈において、その意味するところや、三条天皇の形容にこの二語が使われた意図を考察する。

なお、『栄花物語』をはじめとする古典作品の引用は小学館の新編日本古典文学全集により、巻数、巻名、冊数、頁数を付記した。特に断りのない場合、引用文中の傍線等は引用者によるものであり、旧字、旧仮名遣いを一部改めたところがある。

一、『栄花物語』における三条天皇

まず、『栄花物語』における三条天皇について、その性格、

性質が描写されている部分を確認する。引用には便宜的に番号を付した。

A1 妍子の東宮参入（東宮・三四歳）

帝、東宮と申すは、若くいはいけなうおはしますに、心ことにいみじきものに人思ひきこえさするに、まいてこの御前は御年もおとなびさせたまひ、御有様などもなべてならず、いとをかしうらうらうじうおはしますせば、いと恥づかしげなることなん多くおはしますに、督の殿も、こと御方々よりも、はかなう奉りたる御衣の袖口、重なりなどの、いみじうめでたうおはしますせば、殿の御前も、いとどめでたうのみ重ねきこえさせたまふめり。（巻八「はづはな」①四四六～四四七頁）

A2 妍子の入内、当子内親王の野宮入り（三六歳）

督の殿、内に参らせたまふ。このたびはいと心ことなり。帝の御心いとをかしう、今めかしうらうらうじうおはします、何ごともものの栄えあるさまにおはしますせば、よろづもてはやし思しめしたり。御褌などいみじかべう言ひののしるめる。このごろぞ、斎宮も野の宮におはしますほど、いとめでたながら、宣耀殿の明暮の御仲らひの、にはかにひき離れさせたまふも、御涙こぼれさせたまへど、いまいましなければ忍びさせたまふべし。（巻九「いは

かげ」①四八〇頁）

三条天皇の誕生は、巻二「花山たづぬる中納言」に記述があるが、本人の性格などの詳しい人物描写は、妍子の東宮参入（A1）までなされない。巻九「いはかげ」では、一条天皇の讓位と死去に続き、三条天皇の即位が決まり、改めて妍子が入内する（A2）。これに続き、三条朝の斎宮となった当子内親王の野宮入りの記事がある。加えて、妍子参入の直前には、伊周女と頼宗との間に女兒が生まれたとの記事がある。父の失脚により没落した姫君と、家族と離れて伊勢に向かう内親王、そして娘と離れ離れになる母の様子に挟まれて、妍子の入内は語られる。しかし、妍子の入内に対しては「よろづもてはやし」と帝が関心を寄せているが、当子内親王の離京については母城子の悲嘆のみが語られる。

A3 三条天皇即位（三六歳）

寛弘八年六月十三日御讓位、十月十六日御即位なり。さきざきは見ねば知らず、こたみはいみじうめでたし。帝もいみじうねびととのほり、雄々しうめでたくおはします。大殿などを、なべてならずいみじうおはしますと見たてまつり思ふに、事かぎりありければ、御輿のしりに歩ませたまひたるこそ、あぢきなきことなりけれ。さは、御有様などは、なぞの帝にか、かばかりめでたき御

有様にこそと見たてまつり思ふに、口惜しうこそ。まめ

やかには、そこらの上達部、殿上人御送り仕うまつりたまひて、御輿の捧げられたまへるほどこそ、なほかぎりなき十善の王におはしますめれ。(卷十「ひかげのかづら」①四九五～四九六頁)

A4 禎子内親王との対面(三九歳)

さるべき公の御政をも思しまぎれず、上中宮の御方に渡らせたまへり。えもいはずめでたき御直衣に、なべてならず耀くばかりなる御衣どもを重ねさせたまへり。御かたち有様、雄々しうらうらうじう恥づかしげにおはします。宮の御前は萌黄の御几帳に半隠れておはします。(中略)上、「いづらは、若宮は」とのたまはすれば、命婦の乳母抱きたてまつりて参る。御剣弁の乳母持てまゐる。(卷十一「つばみ花」②三六～三七頁)

A5 当子内親王の出家(院・四二歳)

宮、「ふるの社の」など思されて、あはれなる夕暮に、御手づから尼にならせたまひぬ。またあはれに昔の物語に似たる御事どもなり。皇后宮聞きにくかりつれど、いみじう悲しう思さるることもおろかなり。院は聞しめして、雄々しき御心は、ひたみに、あへなん、めざましかりつるよりはと思されけり。(卷十三「ゆふしで」②九六

頁)

A3以降は即位後の用例である。卷十「ひかげのかづら」は即位の儀で始まる(A3)。ここでも「ねびととのほり」「雄々しう」「めでたく」というように帝の性質に言及するが、新帝についての評価はここまでで、以下はそれに供奉する道長への称賛となっている。A4は卷十一「つばみ花」にて、妍子との間に生まれた禎子内親王と対面する場面、A5は卷十三「ゆふしで」の譲位後の場面である。伊勢から帰京した当子内親王に密通の噂が立ち、手ずから出家した当子内親王に対する三条院の心情が〈雄々し〉とされている。

このように、三条天皇の人物描写では「雄々し」「をかし」「らうらうじ」「おとなし」「ねび」「めでたし」「恥づかしげ」といった語が見られる。「おとなし」「ねび」は、七歳という幼年で即位した一条天皇との対比の語、「をかし」「めでたし」「恥づかしげ」は一般的な褒め言葉と考えられるので、三条天皇本人の性格を表すものとして注目されるのは〈雄々し〉と〈らうらうじ〉である。

〈雄々し〉は「をかし」との誤写が起きやすい言葉であるが、醜態をさらすくらいならば出家を選ぶのは仕方ないという文脈から、A5は確実に〈雄々し〉と認められる例である。また、梅沢本では、東宮時代には「をかし」(A1、A2)、

即位後には〈雄々し〉(A3~5)となっていて、時期による変化が見られる。「をかし」の場合は、性格の良さを表す一般的な語と言えようが、〈雄々し〉(らうらうじ)は、『栄花物語』の文脈において、どういった人物に対し、どういった意味の語として用いられているだろうか。

二、〈雄々し〉

■『栄花物語』における〈雄々し〉

まず、『栄花物語』での〈雄々し〉について検討する。『栄花物語』での〈雄々し〉の用例は全部で九例あり、うち三例が前掲A3~5の三条天皇に関する記述である。残りの六例は、村上天皇、円融天皇、道兼、道長、花山院、頼通についての記述であるが、円融天皇と頼通は〈雄々しくない〉という文脈で用いられる。

B1 『栄花物語』の〈雄々し〉……村上天皇

かくて、今の上の御心ばへあらまほしく、あるべきかぎりおはしましけり。醍醐の聖帝世にめでたくおはしましけるに、またこの帝、堯の子の堯ならむやうに、おほかたの御心ばへの雄々しう気高くかしこうおはしますもの

から、御才もかぎりなし。(中略)時あるも時なきも、御心ざしのほどこよなけれど、いささか恥がましげに、いとほしげにもてなしなどもせさせたまはず、なのめに情ありて、めでたう思しめしわたして、なだらかに掟てさせたまへれば、この女御、御息所たちの御仲もいとめやすく、(下略)(卷一「月の宴」①二〇頁)

B2 『栄花物語』の〈雄々し〉……円融天皇

上は若宮の里におはしますことをいとしろめたう思しのたまはすれど、さりとて内裏の狭きにおはしますべきにあらねば、ただいかにとのみ夜昼分かぬ御使あり。御五十日や百日など過ぎさせたまひて、いみじううつくしうおはします。東三条に行幸あらまほしう思せど、太政大臣の御心に思しはばからせたまふなるべし。帝の御心いとうるはしうめでたうおはしませど、雄々しき方やおはしまさざらんとぞ、世の人申し思ひたる。東三条の大臣、世の中を御心のうちにしそして思すべかめれど、なほうちとけぬさまに御心用ゑ見えさせたまふ。帝の御心強からず、いかにぞやおはしますを見たてまつらせたまへればなるべし。(卷二「花山たづぬる中納言」①一〇四~一〇五頁)

村上天皇は「聖帝」とされる醍醐天皇と並んで高く評価さ

れ、特に後宮運営への称賛に筆が割かれている（B1）。一方、円融天皇は、兼家女の詮子に皇子が生まれても、兼通方を氣にして若宮に会えない。そうした帝の氣弱さが兼家の不信を招いている（B2）。両者は親子ということもあつて、〈雄々し〉の語によって対比されているようにも見える。

*参考 『栄花物語』の道隆

中納言殿の、御かたちも心もいとなまめかしう、御心ざまいとうるはしうおはす。この中納言の御外腹の太郎君、大千代君と聞ゆるを、摂政殿とりはなち、わが御子にせさせたまひて、このごろ中将など聞ゆるに、嫡妻腹の兄君を小千代君とつけたてまつりたまへり。（卷三「さまざまのよろこび」①一四三頁）

B3 『栄花物語』の〈雄々し〉……道兼

摂政殿の二郎君、宰相殿は、御顔色悪しう、毛深く、ことのほかみにくくおはするに、御心ざまいみじうらうらうじう雄々しう、け恐ろしきまでわづらはしうさがなうおはして、中納言殿をつねに教へきこえたまふ御心ざまなり。（中略）ことにたはれたまふことなく、よろづを思しもどきたり。后宮の藤典侍の腹にぞ、御女一人おはすれど、何とも思さず。北の方の御腹に、男君達あまたおはするに、女君のおはせぬをいと口惜しきことに思すべ

B4 『栄花物語』の〈雄々し〉……道長

し。（卷三「さまざまのよろこび」①一四三～一四四頁）五郎君、三位中将にて、御かたちよりはじめ、御心ざまなど、兄君たちをいかに見たてまつり思すにかあらん、ひきたがへ、さまざまいみじうらうらうじう雄々しう、道心もおはし、わが御方に心よせある人などを、心ことに思し顧み、はぐくませたまへり。御心ざますべてなべてならず、あべきかぎりの御心ざまなり。（中略）かうやんごとなき御心ざまを、おのづから世に漏り聞えて、われもわれもと氣色だちきこゆる所どころあれど、今しはし、思ふ心ありとて、さらに聞き入れたまはねば、大殿も、「あやしう、いかに思ふにか」とぞ、思しのたまひける。（卷三「さまざまのよろこび」①一四四～一四五頁）

これらは兼家の子供たちについての説明である。道隆は〈雄々し〉とも〈らうらうじ〉とも評されないが、参考として併記した。道兼（B3）と道長（B4）には〈雄々し〉が〈らうらうじ〉に続けて用いられている。道兼は容貌の醜惡さが先行し、「わづらはし」「さがなし」と良くない性質が挙げられているが、道長は人間関係や仏道心に対する賛美が見られる。

道兼と道長に共通するものとして注目されるのは、妻子に

ついで意識である。道兼は浮気なことを好まず、嫡妻の子であることを重視している。道長は二十という歳なのでまだ妻子がないが、本人にはしっかりと思うところがあると含みを持たせている。これは、道長本人の強い希望で源雅信女、倫子を正妻に迎えることの伏線であろうが、納得のいかない結婚はしないという道長の主体性が表れている。この妻子に関する主体性という点は、村上天皇（B1）の特徴とも通じる。

B5 『栄花物語』の〈雄々し〉……花山院

この院の、鷹司殿より月いと明きに御馬にて帰らせたまひけるを、威しきこえんと思し掟てけるものは、弓矢といふものしてとかくしたまひければ、御衣の袖より矢は通りにけり。さこそいみじう雄々しうおはします院なれど、事がざりおはしませば、いかでかは恐ろしと思さざらん、（下略）（巻四「みはてぬゆめ」①二二九～二三〇頁）

B6 『栄花物語』の〈雄々し〉……頼通

つねよりも心よう御物語聞えたまふに、心とけたらぬ御答へを、例のことながら、ありつることほの聞えたるにやと、御心の鬼に苦しく思さるるに、人知れず御胸騒がせたまふも、あやしう雄々しからぬ御心なりや。それも

御心ざしのかぎりなきなるべし。（巻十二「たまのむらぎく」②五七頁）

次に、花山院（B5）と頼通（B6）についての記述である。花山院について〈雄々し〉という語が使われる例はこれ以外になく、新編全集は頭注で「当座的な性格付与か」（①二二九頁）としている。矢を射かけられてさすがに怖気づいたという表現のためであろう。頼通の例は内親王降嫁を打診された動揺に対する評価であり、続けて「それも妻への愛情故であろう」と、頼通に理解を示す一言を添える。煮え切らない態度で「帝の御心強からず」とされていた円融天皇（B2）とは、同じく〈雄々しくない〉としながらも、評価に差があるようである。

ここまで『栄花物語』における〈雄々し〉の九例を確認したが、これらは全て男性にのみ用いられた用例である。意味としては、現代語とも通ずる男らしさ、勇ましさ、強気さといった性質を表しているものと思われる。加えて、〈雄々し〉の性質を持つとされる村上天皇、道兼、道長は、妻子の扱いや結婚に対する主体性を持っているという特徴がある。しかし、道兼はその性質が全面的に褒められているとは言えない。円融天皇や頼通の〈雄々しくない〉性質への批判を踏まえてみても、『栄花物語』での〈雄々し〉は、基本的には肯定され

るものであるようだが、批判される〈雄々し〉とはどのような性質であろうか。

■『源氏物語』における〈雄々し〉

ここで、他作品における〈雄々し〉の用例を確認する。物語作品における〈雄々し〉の例は決して多くない。『栄花物語』以前の用例としては『源氏物語』に一二例あるが、木村朗子^(注2)は『源氏物語』の〈雄々し〉について、用いられた場面が公的か私的かによって意味が変わることを指摘する。

「男々し」は専ら政治的手腕が問われる公の世界での讃辞であり、私的世界における讃辞には「男々し」さは求められない。私的領域にあつてはかえつて「男々し」いことは否定的意味しかもたないのである。したがつて光源氏などの常に賛美の対象となる人物が私的領域において賛美されるときには「男々し」は否定的意味を担い、光源氏が公の世界において賛美されるときにはその意味が反転するのであつた。

津島知明^(注3)は、頭中将に用いられた〈雄々し〉に注目し、中将時代には美質であつたものが、「年を重ねたにもかかわらず感情を押さえきれない彼の性情を評する語」となっている

述べる。更には、その評価が光源氏の口を借りてなされることによって「知己によって本性が暴かれたような真実味を醸し出す」こと、内大臣から〈雄々し〉さがなくなった後、「をし」「あざやか」の性質は夕霧に引き継がれることを指摘する。

また、馬如慧^(注4)は〈雄々し〉と「あざやか」に注目し、「をし」や「あざやか」などとされる男性（頭中将・夕霧・鬚黒）と「なまめかし」や「愛敬づく」などとされる男性（光源氏・柏木・朱雀院・冷泉帝）との二項対立を指摘する。加えて、『栄花物語』では〈雄々し〉が「帝たちを称賛する時の一つのパターンとして用いられている」と指摘し、政治的手腕を示唆するために〈雄々し〉の性格が付与されているのではないかとする。

ここで、木村が指摘する男性の公的な美質について確認したい。「藤裏葉」の巻で内大臣が夕霧の〈雄々し〉さを評価している場面（C1）では、光源氏は全く優雅であつて改まつた方面にはやや柔和すぎたが、息子の方は学才や心がけも申し分ないと、光源氏と対比して夕霧の〈雄々し〉さを称賛する。その反対が朱雀院の例（C2）である。

C1『源氏物語』の〈雄々し〉……夕霧

「のぞきて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。用意

などいとしづやかにものものしや。あざやかにぬけ出で
およすけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。
かれはただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑
ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公さまは、すこ
したはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。こ
れは才の際もまさり、心用ゐ男々しく、すくよかに、足
らひたりと世におぼえためり」〔藤裏葉〕③四三六〜四
三七頁

C2 『源氏物語』の〈雄々し〉……朱雀院

院の帝は、男々しくすくよかなる方の御才などこそ、心
もとなくおはしますと世人思ひためれ、をかしき筋、な
まめきゆゑゆゑしき方は人にまさりたまへるを、などて
かくおいらかに生ほしたてたまひけむ、(下略)〔若葉
上〕④七三〜七四頁

これらは木村の言うところの「公的」な美質であるが、「私
的」な〈雄々し〉さに言及がなされるのが薫である。薫は二
度にわたって〈雄々しくない〉と指摘され、C3では「うた
て」、C4では「はやりか」という語が付随する。〈雄々し〉
で表される男性性のマイナス部分、女性から見た疎ましい荒々
しさ、強引さが強調された例で、薫にはそのような性質がな
いというのである。

C3 『源氏物語』の〈雄々し〉……薫1

思すらんさま、またのたまひ契りしことなど、いとこま
やかになつかしう言ひて、うたて男々しきけはひなどは
見えたまはぬ人なれば、け疎くすずろはしくなどはあら
ねど、(下略)〔椎本〕⑤一九八頁

C4 『源氏物語』の〈雄々し〉……薫2

もとよりけはひはやかに男々しくなどはものしたまは
ぬ人柄なるを、いよいよしめやかにもてなしをさめたま
へれば、今はみづから聞こえたまふことも、やうやう、
うたてつつましかりし方すこしづつ薄らぎて面馴れたま
ひにたり。〔宿木〕⑤三九三頁

ここまで見てきたように、『源氏物語』において〈雄々し〉
という性質は、学問や政治といった男性に求められる能力を
備えていること、強引さも含めた強気さ、勇ましさといった
性質を表現するものとなっている。公的な面では美点を示し
ているが、私的な人間関係の面では荒々しく強引な性質を指
すことになる。

■ 公私で見る『栄花物語』の〈雄々し〉

ここで、『栄花物語』の〈雄々し〉について、この公私の視

点を当てはめてみたい。村上天皇の例（B1）では、学才などと並べて挙げられており、夕霧と同じく、所謂「公的」な能力を賛美している。また、中略を挟んではいるが、後宮運営についての言及もあった。円融天皇（B2）は反対に、臣下や後宮に関わる公的な面において〈雄々し〉さを持ち得ないのである。道兼（B3）と道長（B4）は、言い回しこそ「いみじうらうじう雄々しう」と、全く同じだが、その前後の評価は正反対である。道兼の〈雄々し〉は好ましいものとされているのか判別し難いが、道兼も女兒の不在を気にするなど、家の運営という公的な能力には注意が向けられている。花山院（B5）はその場の言い回しであるという指摘もあったが、普段は毅然としているという公的な面と取れようか。一方、〈雄々しくない〉とされた頼通の例（B6）は結婚に関わる場面であるが、円融天皇（B2）との違いは、父親を交えて語られる家の問題ではなく、夫婦間の私的な情愛の面を見ている点である。だからこそ、〈雄々しくない〉と言いつつ、頼通に同情的だったのであろう。

これらの例から、夫婦や親子のような一見「私的」な人間関係についてであっても、後宮や家の運営に関することは公的、一対一の個人的な恋愛や情愛に主眼が置かれる場合は私的な領域であると仮定して、三条天皇の用例について考えて

みたい。A3は帝自身の即位、A4、A5は内親王たちに関わることである。A3が公的な場面であることは疑いないが、A4、A5はどうであろうか。A5は、三条院と当子内親王の親子の情愛というよりも、世間体を気にかける姿を述べたものであり、公的な視点であると思われる。A4は判別が難しいが、妍子との夫婦の会話よりも装束や乳母たちの描写に筆が割かれている点を見ると、帝と妻子との私的な関係性ではなく、若宮（禎子内親王）が生まれた妍子方の様子を描写する場面であると取れる。「恥づかしげ」という語を伴っていることを考えても、少なくとも荒々しい男性性を批判する文脈ではない。よって、これら三例は、三条天皇の公的な場面での〈雄々し〉さを肯定するものと言えよう。加えて、梅沢本において三条天皇が〈雄々し〉とされるのは、春宮時代が「をかし」とされていたのと対比するようにして、即位以降、年齢としては三十代半ばから四十代前半のことである。即位を経て、男性的な性質を発揮すべき状況が増したということであろうか。

三、〈いみじうらうじ〉

続いて、〈いみじうらうじ〉の分析に移る。石川徹は^(注)〈いみじうらう

じ」は「靈々じ」であるとして、良い意味で用いる場合は、靈妙、天性優れている、知的、よく人の気持ちを見抜く、などと解釈でき、悪い意味の場合は、神経質すぎる、詮索、邪推をする、といった意であるとする。それらを踏まえ、各作品ではこういった人物に使われているかを確認する。

■『栄花物語』における〈らうらうじ〉

『栄花物語』の〈らうらうじ〉は全部で七例あり、うち五例は前掲の道兼（B3）、道長（B4）、三条天皇（A1、A2、A4）についての記述である。残る二例を以下に挙げる。

D1 『栄花物語』の〈らうらうじ〉……隆姫の乳母

上の御乳母は俊遠が妻なり、これを聞きていとあさましと思ふ。例の人よりは、心ざまはかばかしうらうらうじう、賢くもある人にて、え忍びあへず、時々くねくねしきことなどうちいふを、上かたはらいたしと思す。（卷十二「たまのむらぎく」②五七頁）

D2 『栄花物語』の〈らうらうじ〉……章子内親王（九歳）

撫子の織物の単襲、菖蒲の小桂奉りたる、はなばたと盛り、桜の咲きこぼれたる心地して、気高く匂らうらうじく、今めかしうをかしげなる御有様たくひなし。今年

ぞ九つにならせたまひける。（卷三十一「殿上の花見」③二二〇～二二一頁）

頼通の妻隆姫の乳母（D1）は賢さゆえのひねくれがあり、後に頼通と禊子内親王の縁談を聞き、隆姫を思うあまりに物の怪を発生させた人物である。しかし、『栄花物語』はその乳母を強く責めることはせず、「御乳母にては、などかさもあらざらむと、憎からぬことなり。なほ心賢からん乳母は、人の御ための大事のものにぞありける」（②六四頁）と評価する。D2は続篇に入り、後一条天皇の皇女、九歳の章子内親王の性質を述べたもので、子供に使われた〈らうらうじ〉は、この一例のみである。正篇では成人男性や乳母に使われていたことを踏まえると、正統で語の使用傾向が変わっている可能性もある。

このように、『栄花物語』における〈らうらうじ〉は、一例を除いて成人に用いられている。〈らうらうじ〉で描写された時点の道兼は二十代半ば、道長は二十代前半である。三条天皇には複数回使われるが、いずれも三十代半ば以降である。

■物語作品における〈らうらうじ〉

続いて、他作品での〈らうらうじ〉の用例を確認する。こ

ここでは、比較的数字が多かった『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』の用例数を表1に集約した。対象人物が多いため、〈らうらうじ〉からぬ人物は表に含めず、年齢や性別によって大別した。具体的な人物名は表の下部に示し、複数の用例があった人物は太字にして（ ）内に用例数を示した。

表1 『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』の〈らうらうじ〉

	うつほ	源氏	狭衣
女	11	26	3
男児	5	1	0
男	4	4	1
物	1	1	0
動作	1	1	0
対象	嵯峨院(3)、時紫の上(9)、玉 宗の孫(2)、俊髪(2)、宇治中 蔭女、あて宮、忠君(2)、女一般、 こそ(3歳)、忠朝顔、藤壺、鬘黒 その母、女一般、の子、男路歌の 仲忠、女房と童、人々、明石姫君、 嵯峨院女三宮(兼臘月夜、明石の 家室)、平正明の君、中将の君(光 娘、いぬ宮、按察源氏の召人)、紅 使の君(仲頼の梅大納言、玉鬘大 妹)、小君(兼雅君、玉鬘中君、宇 子)、宮の君治大君、夕霧六 (仲忠の子)、梅壺君、薫、匂宮、常 更衣、贈り物、戸陸介女、世間の物 の叩き方言い	一品宮(3)、狭衣	

これらの作品では、用例数ではいずれも女性に用いられた例が最も多いが、三作品とも成人男性に用いられた例も存在する。また、表には含めていないが、『枕草子』では十七歳の藤原隆家に用いられた例がある。特に女性の用例が多い『源氏物語』では、紫の上に九例使われていることから、〈らうらうじ〉は彼女に備わる性質のひとつであると考えられる。更に、うち四例は「葵」の巻で光源氏と男女関係になる以前の描写で、利発な紫の上の心の機微や物覚えの早さを褒めており、三例は紫の上の死後にその幼少期を回想する文脈で用いられている。こうした、幼いながらも賢くしっかりしているという描写は『枕草子』にも見られる(E1)。D2の章子内親王の例は、これらと同様の用法であろう。

E1 『枕草子』の〈らうらうじ〉……小舎人童

小舎人童、小さくて、髪、いとうるはしきが、筋さはらかに、すこし色なるが、声をかして、かしこまりて物など言ひたるぞ、らうらうじき。(「小舎人童」一一〇頁)

E2 『うつほ物語』の〈らうらうじ〉……嵯峨院(七十代)

尚侍、いかにすべきか、と思ひわづらひたまふほどに、嵯峨の院、近くにおはしまして、「大将の朝臣にもおのせしことども、伝へ聞きたまひけむや。むかしの人の勸事、罪あまるを、今は残りなくなりにたる身なるを、この身

に許したまはば、うれしくなむ」などのたまふさま、らうらうじく、愛敬づかせたまへり。「楼の上・下」③五九一頁)

一方、『うつは物語』では、七十を超す老齡の嵯峨院が、俊蔭女に父俊蔭の処遇について語る場面で〈らうらうじ〉が用いられる(E2)。これは知的で洗練された大人の態度であるとも取れるが、子供の利発さや乳母の利口さといったものと並べると、老齡にも関わらず、かくしゃくとしているという意とも取れようか。

このように〈らうらうじ〉は、賢くしつかりした性質として肯定的に用いられるが、好ましからざる性質として用いられた例もある。

E3 『狭衣物語』の〈らうらうじ〉……一品宮

あさましう、うちゆるぶ世もなう、疎く恥づかしうつらきもののにのみ思して、はかなき言の葉の答へも、稀々は思ひの外にとりなして、言少なに答へないたまひつつ、恥づかしげにらうらうじげなる御目尻に、心よからず見おこせたまへる、月日に添へては、煩はしさのみ勝りたまひて、(巻四②三三三頁)

E4 『狭衣物語』の〈らうらうじ〉……帝

いさや、我が目もわろかりけり、かかる御心ばへを、さ

しも見ざりけるよ、あな恥づかしや、帝はただ国王とて、あざやかにらうらうじうもおはしますさず、さばかりなまめかしう恥づかしげなる御ありさまに、かごとばかりにても、このわたりよりとて御覽ぜられたまへらんよ。(巻三②四六頁)

狭衣の妻一品宮が、夫と打ち解けずに〈らうらうじ〉げな視線を寄こし、狭衣は煩わしさを感じている(E3)。一品宮は賢く洗練されてはいるものの、それが度を超しているという表現である。また、『狭衣物語』では〈らうらうじ〉からぬ帝も登場する。E4は、欠点の多い今姫君の入内についての、狭衣の思惟である。ここで帝は、「あざやか」でも〈らうらうじ〉くもないとされる。「あざやか」は、津島の指摘するように、『源氏物語』の頭中将、夕霧にも使われる表現で、はつきりと目立ち、新鮮で生き生きとした様子を指す。しかし、そうした「あざやか」さ、〈らうらうじさ〉を持たない帝も悪しざまに言われているわけではなく、「なまめかしうはづかしげ」と、光源氏のような優雅さをもった人物とされている。この場合の〈らうらうじくない〉という表現は、E3の一品宮のような神経質さ、D1の隆姫の乳母のような差し出がましきといった負の要素を持たないという意味であると考えられる。

『狭衣物語』の二例を踏まえると、道兼（B3）に用いられた〈らうらうじ〉は、「わづらはし」「さがなし」の語と、兄に対して長幼の序列を無視して上からものを言うような性質とが並べられており、負の意味での用例だったのであろう。〈雄々し〉と併せて考えると、道兼は気が強く賢しらであったということであろうか。道長（B4）にも〈らうらうじ〉が用いられるが、そこらは批判的な文脈ではない。兄弟の性質を同じ語で表しつつ、道兼は批判、道長は賞賛となっているのは、作者の言葉選びの妙である。

四、三条天皇の性質

■ 〈らうらうじ〉き帝

さて、二語の検討結果についてまとめる。『栄花物語』では〈雄々し〉は基本的に男性にしか用いられず、公的な場では男性として好ましい勇ましさを表す。私的な場では〈雄々しくない〉性質も欠点とはならない。〈らうらうじ〉は賢くしつかりしているという意で用いられるが、その賢さが行き過ぎ、神経質である、出しやばっているといった否定的な意味となる場合もある。この判別は、前後の文脈で窺うし

かないようであるが、公的な場において、かつ肯定的な文脈の中だと限定するならば、〈雄々し〉く、かつ〈らうらうじ〉くあることは、男性的な強さを持った聡明な人物を指すということになる。一家の采配をとり、厳しい競争にさらされる男性貴族にとっては望ましい性質であろう。

ただし、それは一般の貴族としての話である。帝の場合はどうだろうか。〈雄々し〉は村上天皇にも用いられていた（B1）が、〈らうらうじ〉は帝の性質として望ましいといえるのだろうか。〈らうらうじ〉の性質を持つ男性皇族としては『うつほ物語』嵯峨院の例があった（E2）。しかし前述の通り、この〈らうらうじ〉は年齢に比して挙動がしつかりしている意とも取れる。また、すでに上皇となった人物であり、純然たる帝の例とはいえない。他に、〈らうらうじ〉の性質を持つ皇族の例として『源氏物語』の匂宮が挙げられるが、少なくとも作中で東宮となることはない。このように、物語作品の帝に対しては、〈らうらうじ〉はほとんど使われていない。というのも、男性貴族と同様の〈らうらうじ〉の性質を帝が持つたならば、政治に深く関わろうとする帝という、臣下から見ると非常に厄介な存在となるからではないか。『狭衣物語』で〈らうらうじ〉帝にも好意的な描写がなされている（E4）のは、実はそうした背景があるからではないだろうか。

かくいう三条天皇は『栄花物語』でも、負の意味での（へらうらうじ）さ、つまり政治に干渉するような、出しゃばった性質をのぞかせている。三条天皇は、即位した寛弘八年（一〇一一）十月、父である冷泉院の見舞いに行幸したいと道長に打診する（F1）。この時は、先んじて院の様子を見に行っていた道長が物の怪を理由に反対したことにより、行幸は実現しなかった。F2では、冷泉院の薨去に際し、自分が帝位についた暁にはもつと待遇を良くしようと考えていたのにと、除目に口を出そうとしていたことが語られる。加えて、その院の葬送でも、子供たちを自分の名代として差し向けるよう指示するなど、自ら采配を取っている。

F1 三条天皇の采配……行幸

とまれかうまれ参りて見たてまつらであべきことにあらず、吉日して、今日明日のほどに行幸あるべきよしを仰せらるれば、大殿、「それげにさぶらふべきことなれど、すべて行幸は思しかけたまふべきにあらず。御物の怪いと恐ろし。見たてまつらせたまふとも、御心の例におはしまさばこそあらめ」など申させたまふにつけても、あはれに思しめされてうち泣かせたまふも、いみじきことわりの御有様なり。（卷十「ひかげのかづら」①四九七頁）

F2 三条天皇の采配……除目

さるは、年ごろは司召に、まづあやしき国をも院分と選りたてまつらせたまへれば、わが御代にだに、いかでよきをとこそ思ひつれ、口惜しくあはれに思しめさる。この大事ども明年にこそはあらめ。まづ御葬送の事など、よろづに大殿のみぞ掟て仕うまつらせたまふ。内にはわが御代りと思しめして、宮々に御送りせさせたまふべう掟て申させたまふも、いみじうあはれにめでたし。（卷十「ひかげのかづら」①四九七～四九八頁）

この他にも、妍子と城子の立后、禊子内親王の降嫁、新造内裏での讓位など、道長と衝突して意向が通らないこともあるが、卷九「いはかげ」での禪讓以後、主体的な意思による三条天皇の行動がたびたび表れている。こうした性質はまさに負の意味での（へらうらうじ）に相当するものであり、周囲の貴族たちにとって傍迷惑な（へらうらうじ）さであったことは、倉本一宏による指摘もある。

しかし、これらの場面では（へらうらうじ）の語は用いられない。道兼のように、批判的な文脈を伴う負の意味の（へらうらうじ）で表現しようと思えばできたはずであるが、『栄花物語』はそれをしなかった。では、『栄花物語』は三条天皇のどのような点を（へらうらうじ）と表現したのであろうか。

■ 二つの家族を持つ帝

中村康夫^(注6)は、そもそも三条天皇についての人物描写は、妍子に関わる場面で多く見られることを指摘する。

三条天皇の性格・資質等に関する記述は妍子が参つてから後にしかなく、これは、一条天皇のそれが彰子入内後にはじめて書かれたことと相通じる。そして、三条天皇の性格・資質等に関する記事が妍子・道長との関係において述べられていることも、一条天皇のそれがほとんど彰子との関係において記されているのに酷似している。(中略) まつりごとにばかり氣を取られることもなく妍子のところへやってきた三条天皇が、容貌といい、人格といい、すべて美しく描かれているのも、妍子の幸いを言うためのものである。

中村は、定子入内の頃はまだ幼少だった一条天皇が、彰子入内のころには大人になっていたため、彰子入内は見栄えがあったという、巻六「かかやく藤壺」での記述(①三〇二頁)を指摘する。三条天皇もA1に「おとなび」、A2に「ねび」といった記述があり、これも妍子と妍子の入内を比較させるものであると読める。更に、三条天皇本人の即位(A3)や、娥子皇后、当子内親王に言及する場面では「雄々し」や「ね

び」とのほり」「めでたし」のみで、肯定的な描写はあるものの、「らうらうじ」は用いられていない。

三条天皇の行動が「らうらうじ」という語で表現されるのは、妍子と禎子内親王の母娘に関わる場面のみである。妻を迎え入れる夫(A1、A2)、我が子に愛情を注ぐ父親(A4)としての三条天皇をこそ、『栄花物語』は「らうらうじ」とする。三条天皇に用いられた三例の前後には「なべてならず」「いとをかし」「いと恥づかしげ」(A1)、「御心いとをかし」「ものの栄えある」(A2)、「恥づかしげ」(A4)などの語があり、いずれも三条天皇に肯定的な文脈の中で用いられている。主体性を持つて賢く家族を支え、家を守るといって、貴族にとつての公的な能力を持った男性、あの道長と同じ性質を持った人物であるという描き方なのである。それは本来帝に求められたであろう、政治に立ち入らず悠然と構えるという姿勢からは外れている。裏返せば、史実において貴族と衝突していたように、帝として望ましい人物ではないということでもある。にもかかわらず、『栄花物語』は三条天皇の「らうらうじさ」を非難しない。

妍子と禎子内親王の存在を意識するとき、三条天皇は、貴族に疎まれた「断絶した皇統の帝」というだけの存在ではなくなり、「帝の妻となる女性の父」という面が浮き上がる。三

条天皇の死後、禎子内親王の東宮参入が噂される頃、禎子の異母兄小一条院は「故院のいみじうしたてまつらせたまはんと思したりしものを」(巻二十六「楚王の夢」②五三五頁)と、三条天皇の禎子に対する養育意識を追懐する。その後、三条天皇が果たせなかった禎子の東宮参入は道長が準備することになり、道長は「われをあはれと思はん人々、わが代りにこまかに仕まつりたまへ」(巻二十八「わかみづ」③一〇〇頁)と、禎子への庇護を人々に訴えている。『栄花物語』がどこまで未来を知って書いているかは判然としないが、三条天皇を父に持ち、道長の鍾愛を受けた禎子は、後に後三条天皇の母、国母となる。三条天皇は、そのような女性の父として、母系から皇統を支えた人物なのである。帝としては否定され得るとしても、子女の世話を道長に補ってもらっているとしても、禎子内親王の父としての姿を肯定する描き方で、『栄花物語』は三条天皇と向き合ったのではないだろうか。

その一方で、三条天皇にはもう一つの家族があった。皇后臈子とその子供たちである。井上真衣は、巻十二「たまのむらぎく」以降の三条天皇は「一貫して負の要素が強く、かつその天皇としての権威にマイナスイメージを付加するものが多い」と言い、それは「後一条の即位を華やかに一点の曇りもなく記述するため」であると述べる。その「負の要素」に

は、禎子内親王の降嫁失敗や当子内親王の密通事件が含まれている。

G 巻十二「たまのむらぎく」における当子内親王と道雅

異事ならず、斎宮の御乳母、やがてかの宮の内侍になされたまへりし中将の乳母の仕業なるべしとて、院いみじくむつからせたまひて、やがて永くまかでさせたまひつ。院には、いとどしき御心地に、これを聞しめししより、いとどまさらせたまふやうに思されて、宮たちを隙なう御使にて、皇后宮と内とのほどの御消息いみじうしきりなり。斎宮われにもあらずいみじう思さる。中将の内侍は、やがて逐はせたまひしままに、かの道雅の君迎へとりて、わが御もとにいみじういたはりて置きたりと聞しめす。さて院には、皇后宮めざましう思しめされて、人知れずいみじう思し嘆かせたまへど、まことそらごと知りがたき御事なれど、世にかく漏り聞えたるに、院の御気色のいといみじきなり。かの在五中将の、「心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしも、かやうのことぞかし。それはまだまことの斎宮にておはせしをりのことなり。されど、これぞ前の斎宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべきことにもあらねど、院のいときはだけく思しのたまはするが、いとかたはらいた

きになん。皇后宮いといみじう思し乱れたるに、宮々の御気色もいといみじきに、東宮もいみじく心やましげに思し乱るべし。(巻十二「たまのむらぎく」②八九〜九〇頁)

Gでは、当子内親王に藤原道雅が通っているという醜聞に対する三条院の憤慨が、三度にわたって記される。そして、巻が変わり、巻十三「ゆふしで」では、当子内親王の出家に対する院の心情が〈雄々し〉によって表現される(A5)。一方で、『栄花物語』をここまで読んできた読者は、三条院が別の家族に対して持っていた〈らうらうじ〉さを知っている。つまり当子内親王に対しては〈雄々し〉さはあっても〈らうらうじ〉さは発揮されない。この二語によって、二つの家族に対する三条院の姿勢の違いが浮き彫りになるのである。

おわりに

本稿では、『栄花物語』での三条天皇の描かれ方に注目し、その性質を表現した〈雄々し〉〈らうらうじ〉という二つの語について、『栄花物語』や他作品における用例から、その意味を分析した。その結果、肯定的な文脈において〈雄々し〉〈らうらうじ〉くあることは、男性的な強さと知性を持ち、一

家の采配をとる男性貴族的な性質であると解釈できることを述べた。それは、摂関政治における帝の性質として必ずしもふさわしくはないものの、妍子や禎子内親王との関係性においては、〈らうらうじ〉という性質を賦与することで、「帝の妻となる女性の父」としての一面が肯定的に描かれているのではないかと考えた。更に、三条天皇の〈らうらうじ〉の性質は、妍子と禎子内親王と関わる場面でのみ言及され、城子と当子内親王に対しては発揮されることがなかったというところから、三条天皇にまつわる二つの家族を対比する効果をももたらしていることを考察した。

注

注1 倉本一宏「二〇一〇」『三条天皇』ミネルヴァ書房

注2 木村朗子「一九九五」

注3 津島知明「二〇〇六」

注4 馬如慧「二〇二〇」

注5 石川徹「一九七八」

注6 この内裏わたりより聞ゆることにより、この上の御乳母などの、祈りを申させたるほどに、おのづから神の御心はかくわづらはしきこえたまふなりけり。(巻十二「たまのむらぎく」②六〇頁)

頁)

注7 倉本一宏「二〇一〇」『三条天皇』ミネルヴァ書房

注8 中村康夫「一九七三」

注9 井上真衣「二〇〇七」

参考文献

- ① 学習院本『栄花物語』新日本古典籍総合データベース(国文学研究資料館) <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100089929/viewer/81> 和田英松・佐藤球「一九〇〇」『栄花物語詳解 六』明治書院(国立国会図書館デジタルコレクション) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992170>
- ② 松村博司「一九五六」『栄花物語の研究』刀江書院
- ③ 松村博司校注「一九五七」『栄花物語 二』朝日新聞社
- ④ 松村博司、山中裕校注「一九六四」『栄花物語 上』岩波書店
- ⑤ 田中重太郎編「一九六九」『校本枕草子』古典文庫
- ⑥ 松村博司「一九七二」『栄花物語全注釈 三』角川書店
- ⑦ 石川徹「一九七八」『枕草子・源氏物語の〈らうらうじ〉「りやうりやうじ」考』『中古文学』二二
- ⑧ 『栄花物語古註釈大成』日本図書センター、一九七九
- ⑨ 松村博司編『栄花物語の研究 校異篇』風間書房、一九八五―一九九〇
- ⑩ 東京大学史料編纂所編『小右記 四』大日本古記録、岩波書店、一九八七
- ⑪ 中村康夫「一九八八」『栄花物語正篇における〈みかど〉造型上の問題(一)：その性格・資質等に関する記述を中心に』『大鏡・栄花物語』日本文学研究大成、国書刊行会(*初出『国文学研究ノート』二、一九七三)
- ⑫ 木村朗子「一九九五」『源氏物語』におけるジェンダーの女性性について『物語研究会編『物語〈女と男〉有精堂』
- ⑬ 山中裕、秋山虔、池田尚隆、福長進校注「一九九七」『栄花物語 二』新編日本古典文学全集、小学館
- ⑭ 津島知明「二〇〇六」『内大臣論——「きらきらし」の変奏曲』室

- 伏信助監修、上原作和編集『人物で読む『源氏物語』第十六卷 内大臣・柏木・夕霧』勉誠出版
- ⑬ 井上真衣「二〇〇七」『物語における斎宮のモチーフとその効果…『栄花物語』当子内親王密通記事に関連して』『詞林』四二
- ⑭ 倉本一宏「二〇一〇」『三条天皇』ミネルヴァ書房
- ⑮ 星山健「二〇一一」『栄花物語』正編研究序説…想定読者という視座』『王朝物語の表現機構…解釈の自動化への抵抗』文学通信(*初出『文学・語学』二二三、二〇一五)
- ⑯ 馬如慧「二〇二〇」『源氏物語』における「ををし」と「あざやか」——二つの男性群の造型——『平安朝文学研究』復刊二八

(にのみや あいり・九州共立大学講師)